

老舗の街・尾張町シリーズ23

尾張町を支えた女たち その拾貳

やっばし、ここが一番



目 次

はじめに	1
大和風呂の引出しに“かきもち”	2
お客さまから一転して	3
ズボンの折り返しに入った活字	5
電車が通るので今の場所に	7
自宅から“通り庭”を通過して工場へ	8
おやじは職人さんより働かないと	10
忙しいときは家事も後回し	11
趣味が仕事だけでないようにして	14
コンピューターDTP時代の“カン”ピューター	16
息子と二世帯住宅を作ったものの	18
卯辰山への早朝散歩	19
あとがき	22

はじめに

「私らなんか……」

ほとんどの人に小冊子のための話をお願いに行く折に聞く言葉です。

「とてもとても、本に載せることの出来るような立派な人生でないし、そんなに上手く話も出来ないし。どこか他にもっと良い人がいるはずだから、そちらへ行ったいま」

ストレートに返事が出ずに、ちょっとクッションを置くというのか、断り方にもニュアンスを軟らかくするというのか。金沢のこの界限の人には、古風な奥ゆかしさがあります。同じことを現代の若者に向かって言えば、ただちにYESかNOの明解な返事が返ってくるのに比べると。

それを決断が遅い、と決めつけるのではなく、むしろ「金沢らしい」人情を持ち合わせている。ドライな割り切りでなく、ウェットなこころの結び付きを大切に残している。自分が先に来るのでなく、まず人様のことから考えることを第一とする習慣を持っているからなのでしょう。

今回の話を聞くに当たり、何回断られたことか。功なり名を遂げた人の話でなく、実際に生き生きと商いをしている人の体験談こそが、真実という価値を光らせながら時代を超えて私たちのハートに訴え掛けて来るはず。との願いが通じて、話を聞き出せたのです。

ご主人と二人。話ながら、時折ご主人に確認するような目くばせをしたり。いよいよ言葉に詰まると、ご主人が説明を入れたり。仲睦まじい熟年の夫婦の姿を見せつけられ、こちらがドギマギさせられるのです。やがては、こんな夫婦になって行きたいなあ、羨ましく感じさせられ。

でも、商売を通じての二人の話は、決してそんな甘いものではなく、しっかりした中にも厳しいものがありました。ただ単に甘いだけ、あるいは厳しいだけ。そんな簡単に割り切れないながらも、商売を続けてきたことに対する“こころ粹”のようなものが、一筋通っているのです。

美味しい食べ物でいうところの隠し味というのでしょうか。平凡に見えながらも、静かにこころに響く言葉に、しばらく耳を傾けて下さい。

大和風呂の引出しに“かきもち”

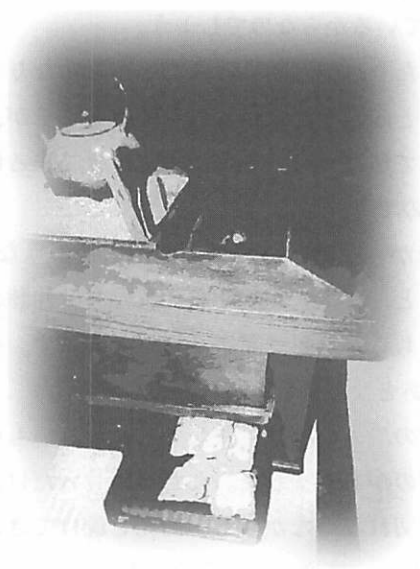
私らは、両もらいの夫婦なんや。印刷の仕事をしていた先代さんは体が弱かったんもあったんか、子供に恵まれなかったんかね。そやから、いつも何かにつけて遊びに行っていた私らが、いつの間にか親戚筋に当たるから、ということで養子縁組みから結婚ということになったんや。

今から思うと、二人とも、小さい頃からそういうつもりで見られて、出入りさせてもろうとったんかね。

主人なんか

「和ちゃん、ちょっとこいや」

と、いつも義理の父が座っている大和風呂(四角い金沢独特の火鉢)の処に呼ばれてたんやそうな。また、いつものアレをもらえるんかな、と期待してちょこんと前に座ると



「ほら、美味しい“かきもち”やぞ」

と、大和風呂の引出しの中にしまっている“かきもち”をもらうんやて。
何しろ、あの大和風呂の引出しの中に入れて置いてある“かきもち”は、全然しけらなくて、食べてもパリパリと美味しいんや。舌の上に乗せると、じゅっと吸い付いてくるような、それでいて香ばしくて。その味が忘れられなくて、つつい通っていたのが、今では……。

何も食べ物に釣られたんやないけど。日ごろから、損得抜きで自分を大切にしてくれることが、たまらなく嬉しかったんやろね。

私もよく遊びに行ったけど、不思議に主人には会わなかったし、“かきもち”をもらったこともなかったみたい。代わりに、海水浴やら山登りなんかには連れて行ってもらったのを覚えとる。男の子と女の子とでは、好みが違うと思うとったんかしら。私も一度、その美味しい“かきもち”を食べたかったのに。

主人に言わせれば

「そりやお前、わしの方がよっぽど可愛いく思われとったからや」

なんて、本当にツラニクイような憎まれ口を叩く始末やし。

お客さまから一転して

浅野川の川沿いにあった尾山倶楽部が、北国第一劇場と名前が変って、芝居よりも映画中心になった昭和25年やったと思う。私ら二人揃って、今の店に入ったのは。

私の家系は、先代の妹の子供にあたるので、お姑さんには大事な女の系列やからと可愛がってもらえたので、その辺の苦労はなかったみたい。主人は主人で、男の系列やから、と妙にお舅さんに気に入られとったし。まあ、ちやほやされとったことは間違いない。せやさかい、最初のうちは、養子縁組や結婚ていうのは楽しいもののように考えとった。

ところが一旦中に入って見ると、外から見ていたのとは大違い。可愛がられることは可愛がられて大事にされるんやけど、責任を持たされるちゅうのかしら。

朝のご飯の準備はみんなが起きて来るまでにしてね

お掃除は家の中もそうやけど、仕事場を綺麗にするのが肝心なのよ
人様よりも先に起きて、寝るのはみんなが寝てからよ
ご返事とか、ご挨拶はハッキリとするのよ
あれも、これも……



えっ、何〜に、こんなにいろいろあるの。私、やって行けるんかしら。目が回るような気がして来て、近所のお店のオカッツァン(おかみさん)を見回して見ると、確かに皆んな朝も早いし。何よりも、朝の早くから、夜の遅くまで動き回っているけど、元気でニコニコしているの。

うちの店が昔あった尾張町通りの処の、隣の合羽屋のオカッツァンなんか、名物の働き者なんやけど、いつも顔中笑顔で、肌なんかツヤツヤしているんや。下手な化粧品なんて要らないくらい。それに、気さくで「あんたが、今度来たお嫁さんかいね。分らないことがあったら、何んでも相談してみまっし。うちも3年前に嫁が来て、今は二つの男の子もおるし。きばる

まっし。そいで、早う子供を作るこっちゃ」

次から次へと出てくる言葉だけやない、考えてもいない先のことを当たり前のようにどんどん言われると、商売屋に嫁いで来たことを嫌でも思い知らされる。この町は、誰も彼もが商売人なのやさかい。

前田の二代目のお殿さまだった利長公が、三代目の利常公に家督を譲る時に隠居先にした富山県高岡の町に住んでいた私には、びっくりのしどうし。もう少し金沢の人の生活と同じ処が多いと思うとったんに。何んというても、お殿さまのご縁で、親戚筋の町のはずやったのだから。

家は、もと侍の家系で、刀を使っていたのを生かして、刃物で物を彫るハンコ屋を開業したと聞いている。根っからの商売人でないさかい、本物の商売人の町に来ると、その辺の根性の入れ方の違いが出てくるんかね。お陰で、最初は毎日が気の張り詰めっぱなし。

夜、主人と二人つきりになると、商売屋の世界に入った戸惑いにお互い苦笑いしてみたりする。

ズボンの折り返しに入った活字

何より、商売屋では自分から体を使って動かさないと、物事は進まないということや。

「あれ、やっといてね」

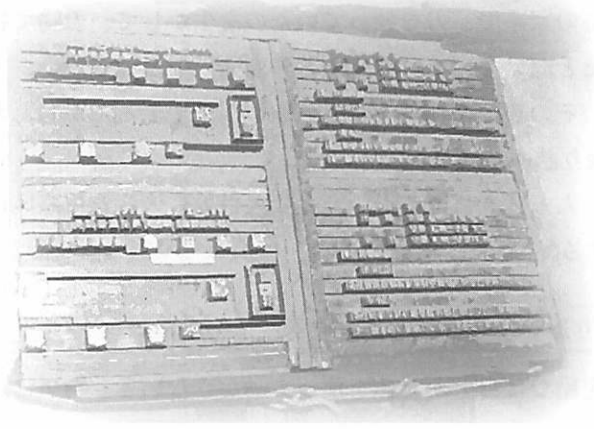
なんて、人頼みにしていても、外へ出掛けて帰ってみたら、まだ何にもしてないなんてことはしょっちゅう。何を、どのように、いつまでに。そして自分で実際に体を使って見本を見せてこそ人は動いてもらえる。

一番嫌う下仕事は、私らが率先してやらないと、皆んながついてきてくれない。口よりも体が先。自分だけでのうて、人様を動かすことの難しさは、商売屋に入って初めて気がつかされた。まして主人なんか、東京から来て、気苦労は人一倍やと思う。

おまけにこの店は、明治の頃の判取帖にここの店の名前が載っていたというくらい、印刷業界では古いし。初代、二代目と数えて私らで三代目にあたり、

わけても外からは注目させられていたっけ。

印刷も、藩政時代の木版から、明治に入ってからでは金属活版が使われ出し、そのための鉛の活字を作る技術を習得するのを競い合う時代になっていたのや。印刷屋は、そうして作られたいい活字をどれだけ揃えられるかで、店の格式が決まるくらいやった。



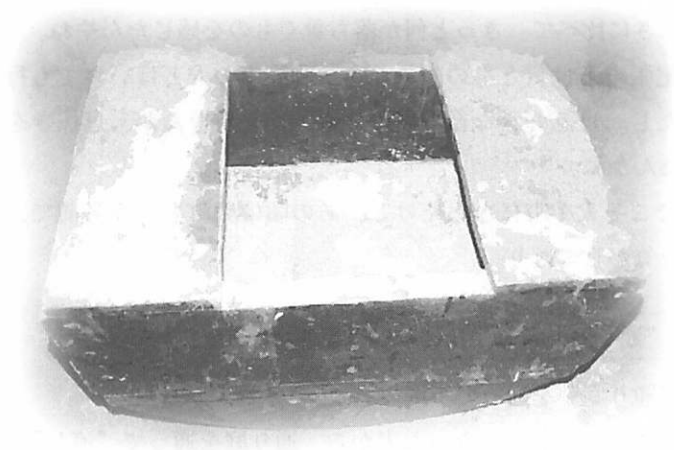
何しろ、使う文字の数だけ活字は要るし、いろんな大きさ別にも要るし、書体別にも要るし……。工場の二階へ上がると、それこそズラリと端から端へ、上から下まで所狭しと白く鈍い色をした鉛の活字が並んでいるんや。1個や2個なら小さいし重さもどうってことないんやけど、ちょっとした印刷をしようとして数をまとめると、ずしっと重さが響いてくる。

お舅さんは、

「活字は印刷屋の命や、たくさんあるからと言活字を粗末にしたらいかん！」

と言うても、男の人のズボンの折り返しの中にはいたりしたら、もうなか

なか見つけられん。今のように、折り返しのない形のズボンやったら、そんなことはないのやけど。例え小さな一本でも、大切に扱わないかんことを教えたかったのやろ。



それだけ仕事道具に対して、愛着と厳しさを持っていたんやね。言うてみれば、“活字は武士の魂”みたいな程大切なものなのね。

電車が通るので今の場所に

この店は間口の割に奥行きが深い、金沢らしい古い構えやけど、昔から住んでいたのと違うんやて。金沢電気軌道株式会社が出来る一年前の大正四年に、電車が走ると道が広がるし、店が手狭になるやろうから、と尾張町の大通りから二本こっちの今の処に引っ越したとか。ちょうど、紺屋(染め物屋)をしていた店が空いて、広さといい、しっかりした造りだったので気持を決めたみたい。何より、活字をたくさん置くには、その重さでもしっかりと支える丈夫さが大

事やったさかい。

案の定、大正八年に市電が第1期として、金沢駅から尾張町を通るようになると、一層町は賑わうようになった代わりに、通りの店は後ろに下がるようになったし。いい潮時やったのかもしれない。

大通りの賑わいを遠くに聞きながら、お城の静けさを感じるここは、金沢らしい情緒があって、私なんか一遍で気に入ってしまったくらいやもの。主人も、東京の騒々しさに比べて、きっと何か落ち着くものを感じたんやね。

それに、尾張町とは目と鼻の先やから、馴染みの人とはいつでも行き来することも出来たし。世話好きな合羽屋のオカツアンなんか、息抜きを兼ねてこの店へ来てたんかね。

町名も今でこそ大手町になったけど、あの頃は殿町という名前で、ちょこっと偉くなった気がしてたり。

自宅から“通り庭”を通過して工場へ

自宅から“通り庭”を通過して工場へ

店と自宅がごっちゃ混ぜになった表から、通り庭を通過して“流し”(台所)からセド(中庭)を過ぎると、一番奥の工場に辿り着く。家の中を動き回っているだけで、すごい運動になるんや。それもダラダラしてたら何こそ言われるか分かったものやないし、職人さんの手前もある。きちんとするところはきちんとしないと、端から“めとにされる”(軽く見られる)。

夜、寝る時以外は自分だけのことが無いのが商売屋なんやね。いつも誰かに見られている。そんな気持が、自然と起きている間中あるんかしら、背筋もシャンとしてるし、笑顔もすぐ出るようになったし。何より、風邪なんかめったに引かないようになってしまった。気持の緩みが無くなって、体が勝手に動くというんか、ご挨拶のお辞儀も旅館の女将のように深々としてる自分に後から気付いてみたり。

店先でソロバンをしたり、帳簿をつけるのを手伝ったりする間を縫って、お昼近くになると流しに立つ。すると出入りの人や、道具の出し入れをする職人

さんから

「おっ、ネーサン、今日はどうやいね」

と、声を掛けられ

「お陰さんで」

振り向きながら挨拶をするけど、手は流しの仕事を続けたまま。器用な真似が出来ようになったものやと、自分で自分に感心し、ちょっと可笑しくなったりする。

それに、こうしてご飯の用意をしたりする間は仕事の手伝いを離れて、女だけの世界に入り込めて気晴らしになったし。今のように共働きで、男の人も家事をするようになった時代と違って、あのころは男と女の仕事ははっきり分れとったもの。



女の私が、男の人の仕事をするんやのうて、あくまで仕事を横から手伝うだけ。口出しなんかすることは論外やったし。代わりに、男の人も家事や育児に

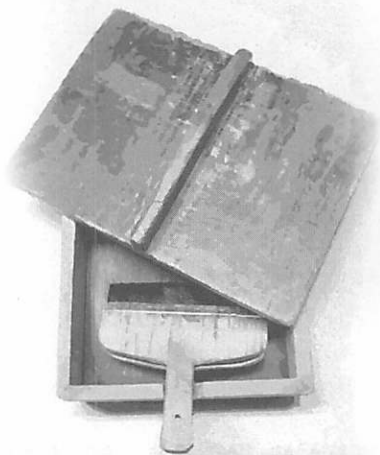
は、そうそう口出しして来んかったし。

そやさかい、家事をしている間は、体のきつさは別にして、楽しい気もせんこともなかった。誰も何も言うてこんし、自分だけの世界を持つ貴重な一時。お姑さんにはいろいろ教えてもらうたけど、体がそんなに強くなかった人なので、あんまし店先には出て来んかったわね。まして、何んにでもガムジャラになるタチの私が嫁いでからは尚更。

奥が深くて薄暗い家やったけど、流しの付近は屋根に天窓があって陽が射し込んでいたし、すぐそこにセド(中庭)もあって、明るい気持ちになれる女だけの場所やった。今でもその前を通ると、ふっと愛着が湧いて来る。

おやじは職人さんより働かないと

今は、週40時間なんてことが言われているけど、あの頃は日中の明るいうちは、もったいなくてもったいなくて、暗くなるのが遅くなると儲け物やと思うとった。



一つでも間違いがあると全部が駄目になるのが印刷やから、正確にするためには何度でも繰り返すという根気が要った。そやさかい、時間はどんだけあっても充分なことはなかったけど、仕上げなければならん日限は決まっているし。どうしても仕事の終わる時間も遅うなってしまう。8時から9時になってしまうのが普通やさかい。

その時間になると、明日のことがあるので、職人さんはさっさと帰ってしまう。誰もいなくなつて、ぼつんと小さな明かりが点いた中で、さあ、それからがお舅さんや私たちの頑張る時間や。明日の朝、職人さんが来るまでに今日の残り、明日の下仕事を準備せならんのだ。

お舅さんも、主人も、私も、皆んなで手分けして仕事をしていると、たちまち10時を回ってしまう。晩ご飯の準備があるから、私は途中で抜けるけど、主人らと職人さんらと一体どっちが偉いのか分らんようになる。

それでいて、朝になって職人さんが出て来ると、昨日の晩のことはおくびにも出さず、澄ました顔で次々と打合せをしてる。少しは、夜に私らで仕事をしたことを言えばいいのに、と思うのやけど。

“おやじは職人さんよりも働かないと、人がついて来ない”

というのが、家訓になっているとか。

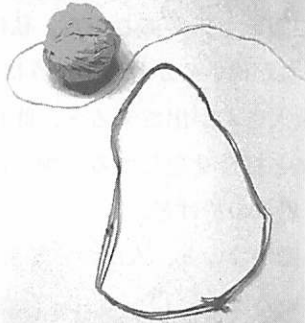
一体、いつ休むんやろ。体の健康のことが心配になってしまう程。けど、主人なんか要領が良いのか、適当な区切りを見つけると奥へ入って来て、ちょっとお酒を一杯なんてしてるけど。

忙しいときは家事も後回し

何が忙しいというて、印刷は期限仕事やさかい大変なんや。職人さんが能率良く仕事をするために、回りの者はほとんど手作業の下働きをさせられる。重い紙を運ぶのは、さすがに男の人やったけど、それでも同じ姿勢で繰り返しの手作業をしていると、肩凝りなんかしょつちょう。お陰で慢性になってしまった。

数えてみると、まず活字を束ねる解版糸を巻き戻すことやろ。一回使って捨

てていたんではたまったもんじゃないから、印刷が終ると、風呂のような木綿の糸をほぐすんや。新聞紙を広げて、バラバラになった解版糸を集めて、全部繫いで玉にするのが、お姑さんと私の仕事。何回も使った糸は、インキが染み込んで黒くなっているさかい、こちらの手も真っ黒になってしまう。小僧さんなんかにさせるにはもったいないと言われ、時間がかかってもお給金を払わなくて済む私らに、いつもお鉢が回って来るんや。



それから、崩した活字を二階のちゃんと元通りの位置へ戻す仕事やろ。カーボンの伝票を、順番を間違えんようにして並べて重ねる仕事やろ。どれをとっても手が汚れ、爪の中まで真っ黒になってしもうて往生してしまう。食事を作る時なんか、洗っても洗ってもインキが落ちないもので、美味しいご飯が作れるかしらと心配になることも度々。

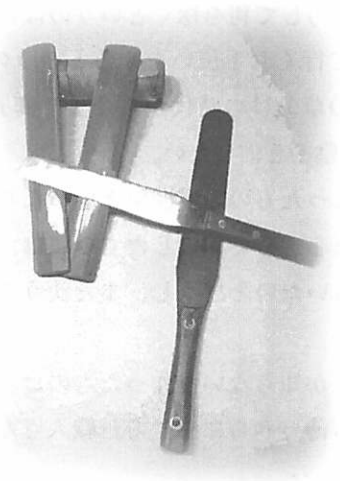
でも、

「仕事があるからみんなが生活出来るんや。家事より仕事が第一」

と、言われてしまえば返す言葉もないし。実際、本当に忙しくなると「何をぼやぼや流して油売つとるんや、早うこっち来て仕事を手伝わんかい」

もう、ご飯の準備もそっちのけで工場へ走ることもあったし。そんなくらいならと、何かの仕事さえしてれば、誰からも怒鳴られることもなかった。

竹べらを使って紙を折って製本作業の手助けをしたり、荷札に玉を付けて針金を通したり、折り紙のようにして糊を使って封筒の袋貼りをしたり……。印刷というもんは、こんなにいろんなことをせないかんのかしら、と改めて思わされた。



尾張町にネオン灯が点いて境界が明るくなった翌年、昭和29年に長女が生まれると、家事だけでのうて育児にも時間が取られるようになり、少しは店の手伝いから身を引けるようになったのも束の間。忙しさが詰まって来ると、「ばあちゃんに子供を見てもらって、お前はこっちへ来い」

と、たちまち雷が落ちて来る。

商売屋というものはこんなもので、規則正しい生活の方が味気ないのかもしれない。毎日毎日が騒々しい方が活気があって良いのかも。自分に与えられたことだけをこなして行くのも人生。自分たちで何もかもして行かなければならないのも人生。誰も彼も同んなじ人生だったら、判で押したようにつまらないものになってしまう。

私たちは、養子縁組みでこの人生を選んだのやから。どれが良いとか悪いとかではなくて、自分らの人生をどう生かして行くかが大事なやろうね。同じ人生、後から悔やむことだけはしたくないし。

趣味が仕事だけでないようにして

印刷という仕事は、紙を汚して利を稼ぐというのは物だけで見た考え方。紙の上に人々の気持を伝えて行くお手伝いをするというのは心から見た考え方。やっぱり、金沢でも印刷の草分けの時代から今まで商売を続けて来れた人も、心の立場を忘れなかったお陰やと信じたい。

不思議なもので、形になったものの雰囲気といったらいいのか、何かしら感じるものになるようや。真心込めて印刷したものには、作った私らの気持が入っていることを知ってもらいたいと思うし、また使う人も分ってもらいたいと考えるのは欲張りかしら。

確かに、単に印刷だけしか知らないで作ったものは、それなりに形は整のうているんやけど、何かしら薄っぺらに感じる。職人さんの腕で、それは立派に仕上がってはいるんやけど……。

そんな時、尾張町の本通りの旦那さんを見ていると、なるほどと納得させられる。長い歴史を持つ老舗の大店やから、ただ物の売り買いだけでのうて、扱っているものに対するこだわり。扱うことに対するこだわり。こころを込めているということなんやろか。

そのためには、広くて深い商品知識だけやない。自分自身を磨くために、茶道や清元、能楽などの芸能文化にも見識を持っていて、ほとんどが名取りクラスになっている。

もともと前田のお殿さまが、江戸時代に徳川幕府の強い詮議をかわすために、武力よりも経済と文化で日本一を目指したのが、こんな風潮の始まりやと聞いている。お殿さまが芸能文化に目が行けば、尾張荒子から一緒について来たという由来を持つ尾張町商人は、同じように話題を合わせるためにせっせと自分も修行に励んだとか。お陰で、他で類を見ないような商いの見識がこの界限で育って来たみたい。

私らはそんな高尚なことまで出来ないけど、やっぱり仕事しか知らなくては若いうちはともかく、いっばしの旦那になると、ここでは低く見られてしまう。何か趣味教養を持つことが一人前になったという証みたい。



主人も、長女が生まれた頃からアマチュア無線を始め、今でも工場の屋根には海外と通信出来るようなアンテナが3本も高く立っているし。このごろは、娘にもらったバイオリンを引くでもなし置いてあり、せめてもとレコードを集めていたのが、最近ではCDにとって代わり、何やら一人で聞いている。

私も、そんな主人を見やりながら、気がついてみると、手習いから始めた書道にどっぷり浸かっているし。恥ずかしいけど、人形作りも始め、まだ上手く行かなくてあっちこっち変な格好になって困っているの。こっちの方はまだ人前に出せるものでないし、何より、すぐ主人にからかわれるので、陽の目を見させていないし。

NHK金沢のテレビ放送が始まった昭和32年にやっと生まれた長男も、ジャズやら自動車に凝り出しながら、いつの間にか大学の図書館で可愛がってもらうようになっている。

やっぱり仕事以外に興味を持つと、魅力が出て人に好かれるんかね。お店の顔も、そんな多才な人が居ると、いろんなことが出来るように見えて、商売の巾も広がるみたい。

コンピューターDTP時代の“カン”ピューター？

金沢中央卸売市場が西念町に完成した年やった(昭和41年)、主人が正式に三代目になったのは。あのころの印刷は手作業がほとんどで、体を動かすことがすぐ仕事することに繋がる時代の全盛みだった。

それが昭和60年に息子に四代目を譲る頃には、もうコンピューター装置を持ってないと、何も仕事が出来ないようになっていた。世の中では、兼六園が国の特別名勝に指定されたり、大野湊神社の“寺中神事能”が金沢市の無形民俗文化財に指定されたり、ここ尾張町では昔懐かしいガス灯が設置されたりと、ここに目が向き変りだしたのに。

自分の手を使ってするのと違い、今のようなコンピューターの時代になって来たら、もう私らは息子に任せなならん。何やらテレビの画面を見ながら、キーボードを叩いている姿は、これまでと全然違うように見えるし。横へ行っても手伝うことが出来ない。

何より大きく変わったのは、金属活版というものがなくなったことや。コンピューターの書体を揃えるだけで済むし、文字の大きさ別に書体を用意する必要もなくなったこと。機械に指示さえすれば、好きな大きさになるんやさかい。

便利と言えば便利なんやけど、コンピューター技術が進めば、すぐさま時代に乗り遅れないように機械を入替えなければならん。お金の掛かりようが今までとは大違い。



でも私らはそれ以上に、仕事道具というものは長く使いこなしてこそ手に馴染んで来るといふ世界で生きて来たのに、今は古くなったら使い物にならないからと、さっさと道具(コンピューター)を取り替えてしまうことに付いて行けないことや。これでいいんやろか……。

確かに仕事の効率は、コンピューターの性能に合わせて格段に良くなっているように見える。ただ、どこまで行っても、コンピューターというものは便利な道具にすぎないのやろ。イマジン(Imagined)の曲を聞いて涙ぐむ息子には、大事なものは機械道具でなくて、それを動かす人やということが分っているみたい。コンピューターは、人のこころを伝えるのに便利な道具やと思う気持ちをいつまでも忘れないでいて欲しいと願うだけ。

主人が茶化したように

「お前、コンピューターといっても人がいなけりゃ動かないんだよ。右と指示すると、右しか行けないんだ。ありゃ、わたらの気持通りに動かせる“カン”コンピューターだよ」

息子と二世帯住宅を作ったものの

息子が高校時代から知っている娘と、良い縁があつて結婚することになった。両家でいろんな準備があつたけど、一番大きなことは、これを機会に店と自宅を分けようとしたことや。

郊外に私らと息子夫婦と一緒に住めるような家を新築したんや。木の香りも真新しい家に入った時は、

「ああこれで住まいと仕事場を別に出来る。ここに帰って来さえすれば、いつ、なんどき、仕事を手伝えと呼び出されることもない。ゆっくり、安心してられる」

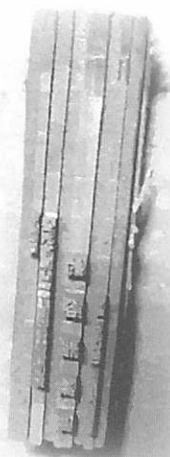
回りは静かだし、近所付き合いもそうそう気を使わなくても良さそうだし。何より、息子の嫁は私に良くしてくれる。楽隠居つてのは、こんなことをいうのかしら。主人と一所懸命に店を守つて、引き継いだ時よりも身代は大きくして息子に譲つたのやから、これくらいの生活をさせてもろうてもバチが当たらんはずや。

ほんとに、どれくらいやったやろう。新居に満足していられたんは。しばらくすると、まず静かすぎて落ち着かないんや。それに、ちょっとその辺へ買い物へという、車で行かないと何も出来ないし。特に帰つて来たとき、何か一つ忘れ物をして、もう一度買い直しに行かなければいけないと思ひ出した時なんか尚更。

一つそうなると、もう後から後にと出て来る。ここが悪いのではなくて、尾張町の、あの殿町の店の生活が、もうどつぷりと身に浸つてしまっているんやね。急に懐かしくなつて、どうしようもなくなつて。主人に

「私、やっぱり、元の場所の方が性に合うみたい。長年生活した処に戻りたい」

意外にも、主人も同じ思いだったらしく、老夫婦揃って店の二階に住む場所を作って舞い戻ることになった。何んでまた、と思った息子も最近は私らの心情を理解し始めたみたい。



「ああ、そこに近江町市場がある。ご近所さんがいる、尾張町のオカッツァンがいる。町全体が騒々しいし、店の仕事の音が聞こえるけど、不思議と気持ちが落ち着く」

また、あの合羽屋のオカッツァンのように、顔に張りが出て来るのが感じられる。この街とともに生活して来た私らは、いつの間にかこの街の一部となってしまう、ここを離れては生きられないほどになっていたんや。

卯辰山への早朝散歩

早起きが日課になってしまっていると、息子に仕事を譲っても習慣かしら、二人とも早くから目が覚めてしまう。もう昔のように朝早く職人さんも来ない

し、時間もたっぷりある。というても、もう二階で隠居している私らには、皆んなが出て来てても特にする事もないけど。



最近、二人して健康を兼ねて卯辰山へ散歩に登ることにしている。頂上の望湖台に立って、思い切り金沢の新鮮な空気を深呼吸して、天気の良い日は日本海までを見渡すと気持ちがすっきりする。

尾張町の通りや、店のある殿町(今では大手町)の通りを見下ろしながら「今日も新しい仕事の日が始まるんや。あそこへ嫁いで来て、主人と一緒に働いて、今は息子に任せている私らの処に、今日も新しい息吹が始まる」

私がそうしている間にも、主人はこまめに動いている。何をしているかと思えば、その辺に落ちているゴミを拾ったり、空き缶を集めたり。自分のためには何にもならないけど、やっぱり住んでいる処を良くしたいという気持ちがそうさせるんかしら。

だって金沢は、私らの大事な町やもの。

宇野禮子・媼(おうな)について

昭和六年一月十四日生。老舗の印刷屋に両もらいで嫁ぎ、伝統の中にも新しい息吹を引き込もうとする夫を助けて、店を繁栄に導く。何よりも、夫婦揃っての多才な趣味が、時代に合った多様な商売を生む原動力となる。

あとがき

昭和61年の11月に、この尾張町小冊子シリーズが始まって以来、印刷は一貫してこちらでお願いしています。“続ける”ということ、最も大切にしている店だからこそ、安心してお任せしているのです。

尾張町という町は商い人の街だけに、継続と信用が第一の財産。どんなに格好良く華々しく店をしていても、十年もしない間に店閉まいをするようでは相手にされません。派手な花火のようなやり方はあまり歓迎されないし、それより確実に長続きする方が好まれるのです。

近年の流通業界の変革に伴って、大型小売店舗が華々しくオープンし、地元経済界に貢献するようなことを言っています。けれど、経済効率優先の店舗は上手く経営されている間とはともかく、一旦非効率になれば、地元には一枚の案内状だけで、後のことを考えずに撤退するケースもあります。

少なくとも尾張町では、こうしたことはありえないように思います。勿論、それぞれの店は続けて商いをするために、日々切磋琢磨していることは当然のことですが。親から子へと、時代を超えて商いの“こころ粹”を伝えて来ているつもりです。

『加賀国尾張町』から数えて23冊目となるこの小冊子は、ともすれば形に走りがちな昨今、“こころ”を主題として書いています。それだけに、こちらの気持ちに対応して頂かないと、せっかくの小冊子が生きて来ないのです。

今回の話に耳を傾けてもらうとお分かりのように、こちらには新しいモノを取り入れながらも、守るべきモノは守る。という姿勢が貫かれております。一見、ごく普通のことのようでいて、案外に忘れ去られているものを持ち続けていることの大切さが、実は今ほど問われている時代なのではないでしょうか。

コンピューターを駆使した仕事の中から、こころの小冊子を作ってもらう。また一方で、能楽の世界で私が師事している先生のところの機関誌「荀宝誌」を作っているとか。時代に押し流されないポリシーは、今回の媼のこころも一役かっているのでしょう。

今後も“続ける”小冊子を、末長くお願い申し上げます。

〈さし絵の説明〉

項	目	内	容
○表紙			「昔の店構え」
<目次>			
○大和風呂の引き出しに“かきもち”			「大和風呂の引き出しにかきもち」
○お客さまから一転して			「土蔵の扉」
○ズボンの折り返しに入った活字			「活字」
			「亜鉛板を腐食させる水槽」
○自宅から“通り庭”を通過して工場へ			「セド(中庭)」
○おやじは職人さんより働かないと			「製本用の“のり箱”」
○忙しいときは家事も後回し			「解版糸」
			「竹べら」
○趣味が仕事だけでないようにして			「アマチュア無線のアンテナ」
○コンピューターDTP時代の “カン”コンピューター			「コンピューター装置」
○息子と二世帯住宅を作ったものの			「活字」
○卯辰山への早朝散歩			「工場の神棚」

発 行 = 1998年3月吉日

著 者 = 石野 琇一

さし絵 = 石野 琇一

発行所 = 金沢市尾張町1丁目11番8号

尾張町商店街振興組合

尾張町若手会